
南葵音楽図書館における海外への日本音楽の発信

——『日本音楽集成』を中心に

山本宗由 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学領域）

1 はじめに

南葵音楽図書館は、カミングス・コレクションを始めとする西洋古典音楽の貴重資料を数多く所蔵していた、日本最初の公共音楽図書館として知られている。これまで、南葵音楽図書館といえば西洋音楽の面から語られることがほとんどであったが、この図書館は国内最大級と言われる紀州徳川家伝来の雅楽コレクションも保有していた。そして、後述する『日本音楽集成』に代表されるような日本音楽の海外発信を積極的に行っていた。

しかし、残念なことに、今日では南葵音楽図書館の所蔵していた西洋音楽の資料群へ注目される程度である。さらに、当時は一緒に所蔵されていた西洋音楽資料と日本音楽資料に関しても、現在は別々の管轄にあり、双方を一体のコレクションとして認識することはされていない。

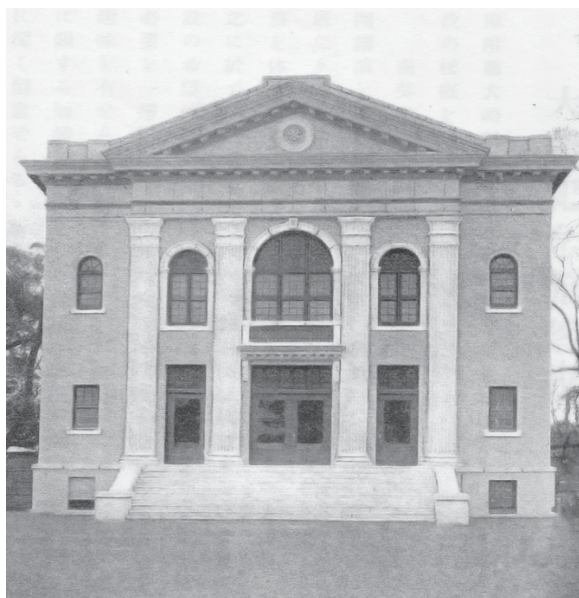


図1 南葵楽堂（『南葵文庫報告第十』より転載）

本稿では、今まで注目されることの少なかった日本音楽の側面から南葵音楽図書館を捉えなおし、西洋と東洋両方の音楽を視野に入れていた研究機関として、南葵音楽図書館の再評価を行うことを目的とする。なお、南葵音楽図書館には時期によって様々な名称¹があるが、混乱をさけるため本稿では南葵音楽図書館で統一する。

2 南葵音楽図書館と紀州徳川家雅楽コレクション

2.1 南葵音楽図書館の概要

南葵音楽図書館とは、紀州徳川家第16代当主の徳川頼貞（1892-1954）により1918年に設立された日本最初の公共音楽図書館である。頼貞の父である徳川頼倫（1872-1925）によって1902年に開設された南葵文庫の一部門として、南葵文庫付設のコンサートホールである南葵楽堂とともに創設された。

南葵音楽図書館を設立した頼貞は、幼少期からレコードなどで西洋音楽に親しみ、1913年から2年間ケンブリッジ大学で音楽学を学んでいる。留学中に、頼貞は音楽学を学ぶとともに数々の演奏会を聴きに行く機会に恵まれた。例えば、イギリスへ向かう途中、モスクワのポリショイ劇場でビゼーのオペラ「カルメン」を観覧しているが、この時に頼貞は日本でみることのできない舞台装置や照明に感銘を受けている。こうした体験が積み重なり、コンサートホールを建てるという計画に発展していった。南葵音楽図書館の基盤となった南葵文庫が目から入る学問を目的としていたのに対して、頼貞は耳から入る学問を目的として南葵楽堂を設立しようと考えた。さらに、留学中の音楽図書館の利用経験から、音楽専門の図書館を設立する必要性を訴えた。こうして、1918年に南葵楽堂と共に、日本初の音楽専門公共図書館である南葵音楽図書館が完成したのである。

設立後は数々の演奏会の実施や音楽資料の提供がなされたが、1923年の関東大震災により、南葵文庫は東京大学附属図書館に移され、南葵楽堂も閉鎖を余儀なくされた。しかし、震災後に南葵音楽事業部が設立され、その付属機関として音楽図書館のみ存続し続けた。1925年から財政難により閉鎖される1931年までは、南葵音楽図書館の歴史のなかで最も盛んに研究成果を発信していた時代である。

1925年に設置された南葵音楽事業部²では、次の目的が掲げられた（南葵音楽図書館 1929：3）。

- 一．音楽ニ関スル研究、調査著作等を助成シ、斯道ノ普及発達ヲ奨励スルコト
- 二．専門家ニ委嘱シテ特殊ノ研究調査ヲ為シ又ハ有益ナル文献ヲ出版スルコト
- 三．音楽堂ヲ設立シ音楽演奏会及ビ講演会等ヲ開クコト
- 四．音楽図書館ヲ設ケ音楽図書、楽譜等ヲ蒐集シテ之ヲ一般ニ公開スルコト
- 五．其ノ他本事業部ノ目的ヲ遂行スルニ必要ト認メタルコト

上記の目的のうち、本研究で注目するのは二で掲げられた研究調査と文献の出版である。この時期、南葵音楽図書館は西洋音楽と東洋音楽の両方において、精力的な研究活動を行っていた。例えば、西洋音楽でいえばカミングス・コレクション³の目録と解題の刊行、日本音楽でいえば雅楽曲を五線譜化した『日本音楽集成』の刊行が挙げられる。西洋音楽関係の研究に関しては、すでにくつかの文献で言及されているため、本稿では今まであまり注目されてこなかった日本音楽関係の研究に焦点をあてる。次項では南葵音楽図書館の所蔵していた日本音楽資料についてみていく。

2.2 紀州徳川家雅楽コレクションの概要

南葵音楽図書館の主なコレクションは頼貞がイギリス留学中に集めた西洋音楽資料群であるが、それとは別に紀州徳川家に代々受け継がれてきた雅楽コレクションがあった。このコレクションは、紀州徳川家第10代当主の徳川治宝が一代で築いたコレクションである。治宝は文芸に精通しており、特に雅楽に興味を持っていたとされている。楽器や楽譜が約150点⁴あり、「日本の伝統的な楽器のコレクションとしては最高のもの」とされている（国立歴史民俗博物館 2004: 313）。また、このコレクションについて、頼貞が次のように述べている（島根県博物館建設促進委員会 1956）。

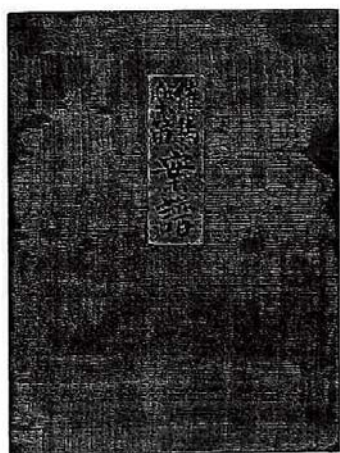
この雅楽器は〔中略〕特に勅許を得て黄金五万両を投じ日本国内はもちろん広く海外までも手を伸ばし蒐集せるもので古楽器としての価値高く国宝級に準ずべきもの数多く中には考古学及音楽史上の重要参考資料たるべきもの又は伝説的名器も含まれ現在日本に於て唯一のコレクションたる

この証言から、大規模な収集活動がなされた国内有数のコレクションであることがわかる。つまり、南葵音楽図書館には日本を代表する西洋音楽コレクションと日本音楽コレクションが同時に存在していたのである。

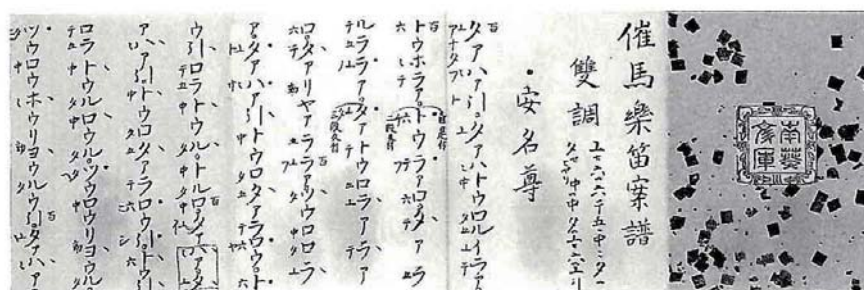
このコレクションは現在、国立歴史民俗博物館に所蔵されており、これまで南葵音楽図書館とは切り離されて語られることが多かった。このことに関して、福島は次のように問題視している（福島 2010: 274-275）。

南葵の音楽活動についても、ヨーロッパ音楽の関係者はカミングス文庫と音楽図書館と楽堂に、日本音楽の関係者は『催馬楽』（注：後述する『日本音楽集成』シリーズのひとつ）の刊行ぐらいにしか関心を示さず、紀州徳川家の雅楽器類については南葵と無関係のように思われている状態である。

この福島の発言をきっかけに南葵音楽図書館の活動を調べていくと、雅楽コレクションとの接点がいくつも見つかった。まず、南葵文庫においてのことだが、記念すべき第一回の創立記念日にこのコレクションの展示会が行われている。どのような経緯で雅楽コレクションの展示をすることになったかは不明だが、第1回の創立記念日で展示が行われたことから、このコレクションの持つ価値について強く意識されていたと考えられる。なお、現在国立歴史民俗博物館に所蔵されているコレクションの楽譜には、1点を除いて南葵文庫の蔵書印が押されており、正式に南葵文庫の所蔵資料として扱われていたことがわかる（図2の本文に蔵書印が確認できる）。



表紙



本文

図2 『催馬楽管案譜』

(『紀州徳川家伝来楽器コレクション』より転載)

また、南葵音楽図書館との直接の関わりはないが、1916年に行われた「雅楽及声明図書館展覧会」(東京音楽学校「邦楽調査」付帯事業)の開催時に、南葵文庫の開設者である徳川頼倫が出品している。

以上に挙げたものは展示資料としての利用にとどまるが、南葵音楽図書館が積極的にこのコレクションを利用した事例としては、『日本音楽集成』の刊行が挙げられる。これは宮内省雅楽課との協力のもと、雅楽を五線譜化して出版したものだ(雅楽コレクション内の雅楽譜に関しては、表1を参照)。『日本音楽集成』は南葵音楽図書館の日本音楽研究の成果としては最もよく知られており、上述の福島発言のとおり日本音楽研究者の間では注目されている。し

かし、日本音楽研究者の間では南葵音楽図書館から出版された兼常清佐による雅楽の五線譜化楽譜として扱われており、南葵音楽図書館の研究成果としてはあまりみなされていない傾向がある。そこで、本稿では『日本音楽集成』を単なる雅楽五線譜化の流れの一つとしてではなく、南葵音楽図書館の研究成果として再評価したい。

表1 紀州徳川家に伝わる雅楽譜一覧

1	蘆声抄	16	三五要録
2	笛の譜	17	琵琶の譜（竹糸秘抄）
3	催馬楽管案譜	18	両大曲
4	龍笛要録譜	19	天長春鶯囀
5	新撰箏箏抄	20	秦声譜
6	箏箏譜	21	琵琶譜
7	箏箏譜 大曲	22	笙の譜
8	箏箏仮名譜 大曲	23	笛譜・龍笛仮名譜
9	笙譜	24	龍笛仮名譜
10	鳳笙譜	25	高麗仮名譜
11	楽譜要録	26	龍笛譜
12	神楽和琴譜	27	横笛譜
13	箏の譜	28	箏譜
14	箏譜	29	高麗横笛譜
15	仁智要録	30	箏箏息替様

注1:『紀州徳川家伝来楽器コレクション』（国立歴史民俗博物館）150頁の 「表

1 紀州徳川家伝来・歴博所蔵の雅楽譜」をもとに、筆者が作成した。

注2：番号は国立歴史民俗博物館の資料番号順

3 南葵音楽図書館による日本音楽集成の試み

南葵音楽図書館においては、西洋音楽の研究のみならず、雅楽コレクションを用いた研究も視野に入れていた。『南葵音楽事業部摘要』によれば、「紀州徳川公爵家に伝来し続いて本図書館の所蔵になってゐるので之等を基礎として何人も未曾有の研究をなさんとしてゐるものである」とされている（南葵音楽

図書館編 1929: 39)。そこで、宮内省雅楽課の山井基清らとの協力の上、兼常清佐と辻莊一によって研究がなされ、その成果として『日本音楽集成』シリーズが刊行されることとなった。寺内によれば、この集成は「ドイツ・オーストリアの『音楽遺産』にヒントを得た企画であり、日本伝統音楽のアンソロジーを作ろうとする試みであった」とされている(寺内 2003: 16)。こうして、1930年に『雅楽 第一編 催馬楽』(以下、『催馬楽』)を刊行することとなる。この集成は前述のとおり、当時邦楽調査掛などを中心に行われていた雅楽を五線譜化⁵するという動きの一つとみなされている。

『催馬楽』の内容にうつる前に、南葵音楽図書館の日本音楽研究における中心人物であった兼常清佐という人物について少し述べておく。兼常清佐は日本音楽を中心に、西洋音楽や音響学など幅広く関心をもっていた音楽学者として知られている。南葵音楽図書館と接点を持つことになった経緯は明らかでないが、前章で述べた「雅楽及声明図書展覧会」が関係していると考えられている(福島 2010: 269)。この展覧会を中心になってまとめていたのが兼常であり、展覧会の筆頭出品者が徳川頼倫であったため、両者には交流があったと考えられる。

その後、南葵音楽図書館が開設されると兼常は資料整理を担当しており、南葵楽堂での演奏会の解説なども執筆している。また、兼常は南葵音楽図書館に関わる以前から、邦楽調査掛において雅楽の五線譜化にも関わっていた。そのため、『日本音楽集成』の刊行にあたって兼常が中心的な役割を果たしたと考えられ、現在では『日本音楽集成』は兼常の業績として語られることが多い。しかしながら、『催馬楽』の目次頁には「日本音楽集成第一編は南葵音楽図書館が、兼常清佐、辻莊一の両氏に托してその道の専門家数氏の技術を基礎として研究編纂せしめたるものなり」と記されており、『日本音楽集成』が南葵音楽図書館を基盤とした研究成果であったことは明らかである。

それでは、実際に『催馬楽』の中身にふれてみたい。なお、本稿は兼常の雅楽五線譜化について扱うものではないため、実際の五線譜化の内容には踏み込まず、『催馬楽』の趣旨と南葵音楽図書館の研究活動に関係する特徴に限定して考察する。

『催馬楽』の構成は解説と6曲の楽譜から成る。以下に目次を示す。

はしがき

催馬樂のメロディの性質について

この楽譜を読むについての注意

I. 安名尊

II. 席田

III. 山城

IV. 美濃山

V. 伊勢海

VI. 更衣

雅樂の楽器（寫眞）

解説（ドイツ文）

補遺

はしがきにおいて、兼常は「我々の仕事の目的は、ただ今日の雅樂といふものを、出来るだけ正確に楽譜に書き現はし、その音楽上の性質を研究する材料にしようとするだけである」と述べている（兼常清佐 1930: 3）。兼常らはこの集成において、雅樂の歴史的な変化を一切考慮せず、当時演奏されているままの音を五線譜に残そうとしたのである。この姿勢は、後に五線譜化の考え方の相違による、近衛直麿との論争に発展する。この論争に関しては本稿の趣旨をずれるため詳述しないが、この論争により『催馬樂』は南葵音楽図書館の研究というよりも、兼常による雅樂五線譜化の流れの一つとして注目されるようになった。

しかし、あまり注目されないこの書籍の特徴として、日本語とドイツ語で構成されていることが挙げられる。ドイツ語による解説が付いている他、日本語で表記されている図表にもドイツ語訳が併記されている。また、楽譜に関しては日本語の表記は見られない（譜例 1 参照）。さらに、雅樂器の写真を載せて、簡単なドイツ語による説明が付加されている。雅樂に関しては各国で行われていた万博での出品などを通して、海外に発信されてはいたが、当時まだ雅樂器について情報を得る機会が少なかった欧米においては、有益な資料であったと考えられる。

II MUSHIRODA

Sōdyō-Ryo

The musical score is arranged in a system with seven staves. The top staff is for the vocal part (Uta), with lyrics in two parts: I. Mu - - si -ro -da no, - - - ya! - - - and II. Su - - -mu tu -ru no, - - - ya! - - -. Below the vocal part is the Syakubyōsi (shakuhachi) part. The lower staves are for instruments: Syō (flute), Hitiriki (flute), Hué (flute), Koto, and Biwa (bass). The score includes various musical notations such as 'Solo', 'Tutti', 'O.2a', 'Sua sopra', and 'Sua sotto'.

譜例 1 席田の表記例

南葵音楽図書館が日本音楽に関する資料を海外向けに出版する試みは『日本音楽集成』に限ったことではない。南葵音楽図書館は『催馬楽』を刊行した時期に、同図書館評議員の遠藤宏が編集した英語による東洋音楽文献目録も刊行している。このことから、南葵音楽図書館が欧米諸国を対象に日本音楽を発信することを前提として、『日本音楽集成』の刊行を行ったことは明白である。南葵音楽図書館は雅楽に限らず、東洋音楽を広く欧米に発信することを目的と

しており、『日本音楽集成』はその一部であったといえる。

さらに、この書籍は刊行後、海外の図書館や研究機関などに寄贈されている。この頃の南葵音楽図書館は『催馬楽』の他にも、カミングス・コレクションの目録などを刊行しており、東洋音楽、西洋音楽の両方において積極的に海外への発信を行っていた。『日本音楽集成』は、雅楽を五線譜化して海外へ発信するという宮内省の目的に、南葵音楽図書館の海外に向けた研究成果の発信という目的が合致した結果ともいえるのではないだろうか。南葵音楽図書館が行っていた研究活動として『日本音楽集成』を捉えたとき、その背景には単なる雅楽の五線譜化ではなく、東洋と西洋双方の音楽を視野に入れた壮大な研究プロジェクトの一環であることが見えてくるのである。

ただ、このシリーズは第7編まで刊行が予定されていたのだが、残念なことに1931年に南葵音楽図書館が閉鎖となり、『催馬楽』の刊行のみで終わってしまった。『催馬楽』の巻頭には朗詠、久米舞、東遊、神楽、唐楽、高麗楽の刊行を予定していることが記されており、朗詠と久米舞に関しては近刊と書かれている。そのため、資料自体は見つかっていないが、朗詠と久米舞に関してはすでに五線譜化が進められていたことが伺える。おそらく『催馬楽』刊行時点で刊行の用意は整っていたのだろうが、未刊に終わってしまったのは残念な限りである。

4 おわりに

現在、南葵音楽図書館といえば、貴重な西洋音楽資料を所蔵していた図書館といった程度の認識しかない。しかし、西洋音楽に限らず、日本音楽においても貴重な資料を所蔵し、それらを使って行ってきた研究活動は西洋と東洋どちらの音楽も捉えた先進的なものであった。今日では南葵音楽図書館の業績は、それぞれの研究者の業績として扱われ、研究を可能にした資料に関しても資料の価値のみが注目されている。しかし、いずれも資料を保存し研究を助成した南葵音楽図書館という基盤なしには生まれ得なかったものである。今後は『日本音楽集成』以外の研究成果についても分析し、南葵音楽図書館の多面的な活動について評価をしていきたい。

[注]

- ¹ 南葵音楽図書館の名称は、1918年～23年：南葵文庫音楽部、1925年～31年：南葵音楽図書館、1967年～77年：大木コレクション南葵音楽文庫となっている。また、現在は慶応義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センターによって資料がデジタル化され、デジタル南葵楽堂 (<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/>) として一部の資料が公開されている。本稿では1925年～31年の活動を主として考察するため、南葵音楽図書館で統一することとした。
- ² 1925年～31年の間、南葵音楽図書館は南葵音楽事業部の附属施設として扱われた。
- ³ パーセル研究者として知られるウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings (1831-1915) のコレクション。南葵音楽図書館の中核コレクションとされている。
- ⁴ コレクションの主な中身は、笙、箏、龍笛、脳管、高麗笛、神楽笛、笏拍子、銅簫、明笛、琵琶、箏、和琴、七絃琴、瑟、太鼓、桴、鞆鼓、鉦鼓、錦鼓、壺鼓、調子笛、楽譜となっている。
- ⁵ 『日本音楽集成』以外では、田中正平や近衛直麿が五線譜化を行っている。

主要参考文献

- 有田芳子, 後藤多恵子 1977 「Document Series No. 1 南葵音楽文庫」『塔』第17号
- 兼常清佐, 辻莊一 1930 『催馬楽』(日本音楽集成 第1編 雅楽 第1集) 南葵音楽図書館
- 蒲生美津子 2013 『音楽格闘家兼常清佐の生涯』大空社
- 久保田敏子 1968 「雅楽曲の五線譜化に関する問題と試案」『相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集』第15号
- 国立歴史民俗博物館編 2004 『紀州徳川家伝来楽器コレクション』国立歴史民俗博物館
- 2012 『楽器は語る：紀州藩主徳川治宝と君子の楽』国立歴史民俗博物館
- 篠田大基 2008 「南葵音楽文庫の出版活動」『Oxalis——音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』第1号
- 島根県博物館建設促進委員会 1956 『元紀州徳川家所蔵雅楽器目録』
- 塚原康子 2009 『明治国家と雅楽：伝統の近代化／国楽の創成』有志舎
- 寺内直子 1999 「近代における雅楽の「普遍化」—近衛直麿の業績を中心に—」『国際文化学研究：神戸大学国際文化学部紀要』第12号

- 2001「邦楽調査掛における雅楽採譜作業の経緯」『日本文化論年報』第4号
- 2003『近代日本における伝統音楽の再認識：雅楽の五線譜化をめぐる』科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 2007「国立劇場の雅楽「復元」プロジェクトにおける「伝統」への挑戦」『国際文化学研究：神戸大学国際文化学部紀要』第27号
- 2010『雅楽の「近代」と「現代」：継承・普及・創造の軌跡』岩波書店
- 東京音楽学校編 1926『雅楽及聲明圖書展覽目録』東京音楽学校
- 徳川頼貞 1943『蒼庭樂話』春陽堂書店
- 1956『頼貞随想』河出書房
- 南葵文庫編 1909-1923『南葵文庫報告』（第1-第15）南葵文庫
- 南葵音楽図書館編 1929『南葵音楽事業部摘要 第1』南葵音楽図書館
- 福島和夫 2010「兼常清佐・徳川頼貞・石橋益恵」『兼常清佐ミクロコスモス』大空社
- 正木光江 1995「南葵音楽図書館の成立過程」『音楽情報と図書館』大空社
- 村上紀史郎 2012『音楽の殿様・徳川頼貞——1500億円の〈ノーブレス・オブリージュ〉』藤原書店
- Hiroshi, Endo. 1929. *Bibliography of Oriental and Primitive Music*. Nanki Music Library.
- Kiyosuke, Kanetsune, Syoichi, Tsuji, ed. 1925. *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*. Nanki Music Library.